

北野文書 ③「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員
安井 幹夫 Mikio Yasui

(7) 明治廿四年五月四日 大阪真明講分教会出願の件

さあへ尋る事情へ 事情りを尋る処への事情 みなゆるしてある あつて一時ゆるしてある處へ自由用になるな」(11オ)

らん わかるまひ どふゆふ事とをもふ ミなゆるしてある中に自由用なるならん をなじつりのり どふゆふものでならん さきへの処 又への事情あとハさき 元といふ 何でも元ハはやいとをもふやろ 元といふ どんな事もよきりもどんなりも元にあるなれと事情自由用になるり」(11ウ)

をはこんで なるならん どんな事情も元にとまつてある今一時尋る処 もふしゆんへの道であるか りであるか をさまろへまいか どふかたとづね じつとしていれば じつとしていよふなもの みれパーツ きけば一ツ おいへの道ハ処へでハわかるやろ それより事情ハ一ツ時」(12オ) はじめかけるがよい さあへはじめへりハゆるす ゆるさんハないで 処へのりをきいて なるほど之いふりをまたにやならん さあへかゝれへ

注 この「おさしづ」の日付は、五月五日で、「大阪真明講分教会出願に付出張願」である。

(8) 明治廿四年五月 本席身上の障り二付御伺

さあへ身の處にてをもちがけない身のさわりとふゆふものと」(12ウ)

こふゆふものともふ 十分のりをきいてをさまつていの中に さあへどふむならん事情がある どふゆふ事情なら まあみんなようくる中つくす中 たがいへハをもて一ツのり 中に一ツ 又中に一ツどふもならん どれだけのいつきとふぜんでもきいておかねバならん たつてから何」(13オ)

であつたなあとゆふよふでわどふもならん 心とゆふりハつゝんである りもをもてにでるりもある 一時はらの中とんとわからん そこで身のさわり はらがせつない だんじとりなをし どんなりも心にもたづ 神一条の道をよふきゝわけ 是迄よふりきたる道 何ほどむつかしい」(13ウ)

道でもとふりきた なんでもとふらにやならん とふさにやならん あぶなき事情でもついにハりにをさまるも なるほどのりにをときておさまつてきた いかはどうつたとて きたたとてなんにもならん そんな事ぐらいでをされるよふな事でハ此道ハたゝん ないでもない事」(14オ)

だんへ日からもきて こくげん事情をもつてさとさんならん事もある 刻限一ツのりをきゝわけ あらへきゝわけん事にハはじめられん 一寸きいてをけばまんへ事情のりによつて 心にかけているやろ なんでもなきりがわかりがたなひ をさめているも心のりにをもふ なんてもな」(14ウ)

いりがかたいとおもうりハやろこい さあでかける なんだへ なにほともの神のりと心のりと ころつとそふいする

身上にどれだけの事情ありてもあんじる事ハなひ 内々のりが二ツになつてある をさまらんとゆへばあんじる 是迄しんじつふかきいんねんをもつて」(15オ)

よりくる處 日々はこぶ處十分うけとつてある たがいへの心をしいかりむすんでくれる

注 この「おさしづ」の日付は、五月五日である。

(9) 明治廿四年五月八日夜 本席身上御障り二付御願

さあへ身上へへ身上に一ツどふゆふ事である はなし一ツへのりをきき 事情とふゆふ事さしづからはなし それへ」(15ウ)

つたへ わかるりもわからんりもあるやろ さしづどふりより どんな事したてをさまらん はなしする ほつとふかんでハなしする むつかしい事ハゆわん 山々はなしある めんへ心のりでさしづのりがじやまになる事もある 世界といふおふくの中ならんから 一ツの道」(16オ)

はじめかけたる せんへ事情にさとしたる 三年といふ 千日といふ 三年の日がたつまでハ一寸むつかしいなれど 三年の日がらたてパーツにあつめてしまふ どふしてあつめる いんの道の道から入こんで あちらへこちらへきく みればりがあれバ道がつたわらにやなるまい 道から道をとふる」(16ウ) ならむつかしい事ハなひ 日々の事情はじまつた道 今一筋世上世界どふり 上の道二ツの道ある 元々はこぶ道 おふぜの中 なんめへゆいかける はなしがかわる さしづより外にリハなきもの むつかしい中でもさしづのりでとふる人間とゆふハその日への道しかない」(17オ)

神がつけた道ハころつとかわつた道 よほど年限たつた おいへの心をよせば ふあんながらよかつたなあとこれまでとふりきた一時一寸はなしへ おふほふの心のりで一ツなんでも人にもゆへん 人にもみせられん みこふした神の道 世界のどふりでしばらくへとゆふたる道 世界へてる」(17ウ)

でゝくる道 これまでなりきたる道ハ神の道 どんな事するも第一屋敷の道 地場一ツの道 たづねてさしづ 今迄はこびかけた道 ミなをもふよふになつてある たいもふとゆふ事情もミなをさまりきた かつてゆふてハどふもならん かつてとゆふハ人間心の道であるから一寸よいなれど」(18オ)

いつへまでもをさまらん なにをしたのやなあとといふ これてむつかしい なわをひき くいをうつとゆへばたづねる さしづどふりたつねはずいぶんのりにミてさしづする事もある ならん道もおしての道ハつゝかん 何かの事もきゝわけてくれ とふなりこふなりの道さへをさまれば」(18ウ)

世界さきへの道ハ一ツもいらん 萬事一ツりによせてはなしをく これだけよふきいてをけ

注 「いんの道の道」はそのまま。「いんねんの道」の誤写であろう。